

27) エンレイソウとテンナンショウとヤブレガサ=延齡草・天南星・破れ傘

この3種類は4月下旬から5月上旬にかけて、日本の里山でよく目にする、やや大型の山野草なので、ここでまとめてご紹介したい。

まずズエンレイソウはユリ科の多年草で、別名をタチアオイとも言う。漢字では『延齡草』と記すために、ことその他ファンも多い。根茎からの高さは大きいものでは40cm程度に及び、葉は葉柄を持つことなく、茎頂に3枚の葉が輪生する。葉の中心から短い花柄が伸びて、小さな花をつける。花は花弁を持たず3枚の緑白色または淡紫色の萼片からなり、横を向いて咲く。北海道から九州まで、全国の山林のやや湿潤地に生える。学名は『*Trillium apetalon*』で、黒く熟した果実は食用になるものの、根茎にはサポニンを多く含み有毒植物である。しかし漢方ではこれを『延齡草根』と呼び、胃腸薬や催吐剤として用いる。花は可憐なため庭で栽培されることも少なくない。また園芸種としては萼が赤紫を帯びたものや白いもの、八重咲きのものなど変化が多く、野草愛好家にとっては人気品種の一つにもなっている。北海道名寄市ではこれを市の花としており、その意味は市民の延齡長寿を願ったものなのだろう。またカナダではオンタリオ州の州花に指定されている。

一方テンナンショウはサトイモ科の多年草で、漢字では『点南星』と記す。日本列島の山野、及び朝鮮半島に分布し、学名は『*Arisaema serratum*』で、球根を持つ。葉は複葉で数枚付き、葉柄の上に、仏炎苞のある花柄を伸ばす。この仏炎苞はさまざまな形と色があり、肉穂花序を伴っている。このため多くの別称があり、マムシ草などと呼ぶ地方もある。雌雄異株が多いものの、個体によってはそのときの栄養状態に応じて性転換することが知られている。根球にはシュウ酸カルシウムが多く含まれており、有毒ではあるが、漢方ではこれを輪切りにして乾燥させたものを『天南星』と呼び、煎じて、鎮痙、去痰、健胃薬として用いる。またでんぷん質を多く含み、アイヌはこのでんぷん質をうまく取り出して食用にしていたという。果実は小さなトウモロコシ状となり、真赤に熟すと多汁で甘酸っぱい。アイヌはこれをキナエマウリ(草イチゴ)と称して食用としていた。

さてヤブレガサはキク科の多年草で、ヤブレカラカサとか、キツネノカラカサなどとも言う。若い固体の根出葉は1枚のみで、花柄は出ない。ところが数年たって、個体に栄養分が蓄積されてくると、1枚の根出葉の他に、長い葉柄を持った数枚の茎葉を互生してつけるようになる。和名の由来は冬季、地上部が枯れて、翌春、傘を閉じたような形状の芽が出て、次第に切れ込みが深い掌状葉に変化してくるため、この形状が破れた傘のように見えるためである。学名は『*Syneilesis palmata*』で、属名は「合着して巻いた子葉を持つ」という意味で、種小辞は「掌状の」という意味である。7月から9月頃にかけて、花茎の上部に白い頭上花を円錐状につける。朝鮮でも日本でも食用にされたこともあった。



エンレイソウの花。これはやや紫がかった個体だがよく見かける(長野県軽井沢町)。



こちらの方は白みがかかったエンレイソウだが、たまに見かける花である(長野県軽井沢町)。



しかし中にはこんなに赤紫色の濃いものもあった。これがエンレイソウの魅力なのだろう。



テンナンショウの花。このあたりではマムシ草とも言う。花もさることながら茎の部分の文様が、どことなく蛇に見えるからであろう(下の写真も長野県軽井沢町)。



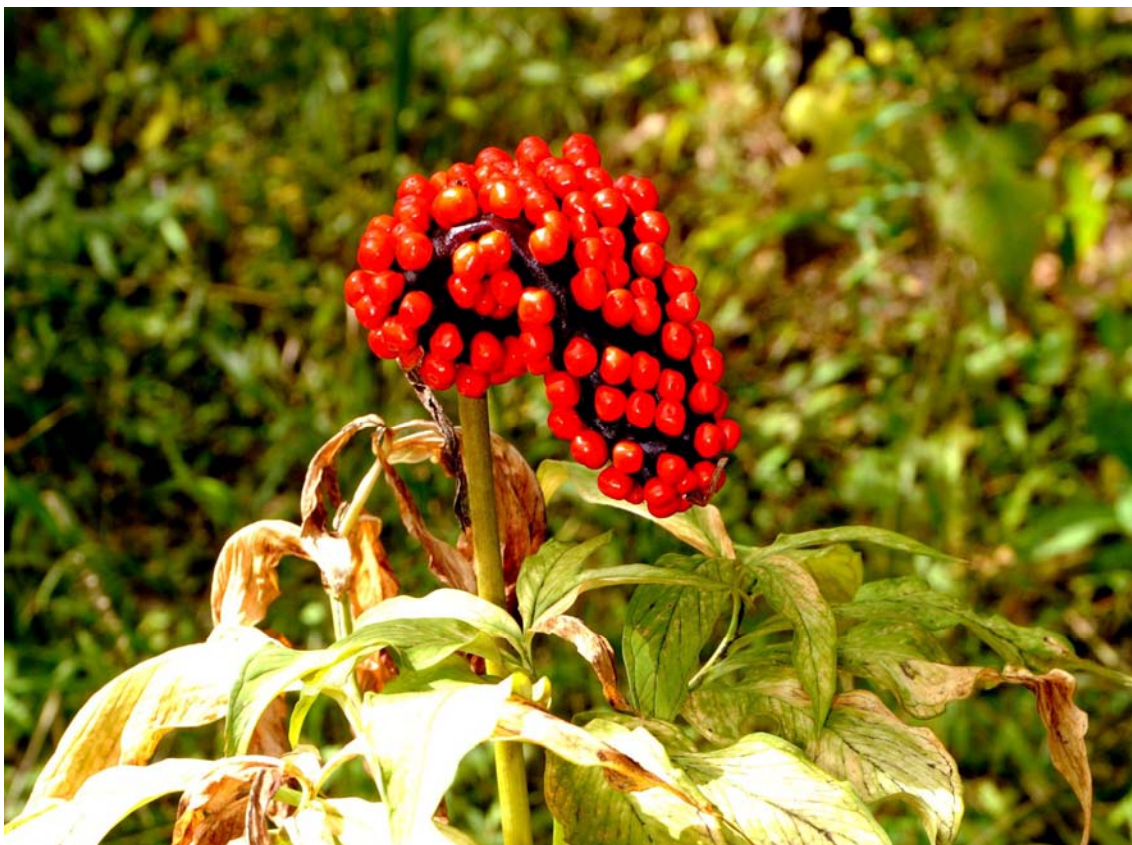
テンナンショウにはこの写真のように、全体的にグリーンの花を咲かせる個体もある。この個体はどれも若い株で、古株になると前ページのように変化してくるのかもしれない。



テンナンショウの茎は、古株になるとこのような文様が現れることが多い(長野県軽井沢町)。



テンナンショウは秋になると、こんなに美しい真っ赤な果実を実らせる(長野県軽井沢町)。



テンナンショウの果実はかなり大きくなるため、時にはこのように曲がってしまうこともある。



いっせいに芽をふいてきたヤブレガサ(長野県軽井沢町)。

[目次に戻る](#)